歴史を歩く ⑭

町文化財紹介コーナー

「月笑寺の精霊迎えと盆近花」

盆近花

「月笑寺の精霊迎えと盆近花」

かつて南光寺北側に、『月笑寺』という寺院があった。この寺は、宮之馬場にあった大崎郷の菩提寺『心慶寺』の隠居寺であったと言われている。開山の年代は不明であるが、心慶寺の再興が、天正年間（1500年代末）と推測され、かつ月笑寺の初代住職が心慶寺の二代目住職鷹岳宗俊和尚とされることから、1600年代初頭の開山であろうと思われる。

寺は明治の廃仏毀釈によって失われたが、研修センターグラウンドの東側にある墓地の一角にひっそりと不動明王像と、僧侶の墓がある。その墓は月笑寺五代目住職である禅勇健剛和尚の墓であり、今に続く七夕の『精霊迎え』を提唱した人物と伝えられている。この和尚の生没年代は不明であるが、1600年代後半ごろと推定される。

そもそも心慶寺の隠居寺であった月笑寺は、参詣者も少なくさびれた寺であった。四代目住職であった竜山孤雲和尚は、千体の仏像を描いて本堂に配し、宣伝と説教を精力的に行ったが、効果は上がらなかった。そして五代目健剛和尚は、旧暦の7月7日に開かれていた『七夕市』に着目し、一計を案じた。

現在の神領町・町東・町西集落は、大崎郷の『野町』として、近郊住民の必要物資を調達する場所であった。江戸時代には旧2月27日の『みの市』、旧7月7日の『七夕市』、旧12月17日の『籠市』と27日の『暮れ市』の年4回、定期市が開かれていた。七夕市では、盆用品や盆料理の材料を買い求める客で野町はにぎわっていたようである。

健剛和尚は、月笑寺の門前に地蔵を建立し、この七夕市に来る民衆に対し、「ここはあの世への入口である。お盆には精霊様がこの地蔵様のところから戻って来られるのだから、ここにお迎えに来なさい。」と辻説法を行った。

以後、市に来た民衆は月笑寺にお参りに来て、線香を奉り、精霊迎えをすることが習慣となった。七夕市は平成になって途絶えてしまったが、現在でも精霊迎えだけは、地元の『青友会』の方々によって守り続けられている。

ところで精霊迎えにまつわる昔話がある。恥ずかしながら私自身も町東集落に生まれ育ちながら、現文化財保護審議会委員の小野辰男氏からこの昔話を聞くまでは全く知らずにいた。

昔、月笑寺の近くに年老いて病気がちな母親とその息子が住んでいた。息子は少しばかり物覚えが悪かったようで、自らの死期が近くなったことを悟った母は、枕元に息子を呼んで、このように言い伝えた。

「私が死んでも、嘆き悲しまないでほしい。庭の隅の境に植えている木が花咲く時は、お盆が近いということだから、その時は、寺に行ってお経をあげなさい。そうすれば、私はこの世に戻ってくるからね。」と。

『庭の隅の境に植えている木』とは、『むくげ』であった。初夏～秋までの長期間に次から次へと涼やかで優しい大輪の一日花を咲かせる木である。この辺りでは、7月から8月にかけて花を咲かす。

息子は「むくげの花が咲く頃は盆近し」と唱え続けた。そして誰由と無く、地域の人々がむくげのことを『ぼんちか（盆近花）』と呼ぶようになったのだと言う。

小野辰男氏の調べによれば、東は志布志市志布志町、西は鹿屋市大姶良町、北は鹿屋市輝北町あたりまでの範囲で『ぼんちか』と呼んでいるそうである。

この物質文明の世の中にあって、『精霊』とは架空の産物と思う人は少なくないだろう。あるいは私もその一人なのかもしれない。

しかし、私達は祖先たちによってこの世に生を受け、先人たちが培ってきた風土の中で生きている。地域に残された文化は、例えば「精霊を迎える」という風習を通じて、それを私たちに伝えているのだ。

盆近花が、今年も『精霊様』の訪れを告げている。私は、今の自分を生み育ててくれた『せろさぁ』を感謝の心でお迎えしたい。

大崎町埋蔵文化財専門員
【内村憲和】

月笑寺５代住職健剛和尚の墓（手前）